



昔話とその時代・序(上)

塩田平民話研究所 所長 稲垣 勇一

私の目の前に、民話と創作民話の二冊の絵本がある。一冊はスイスの作家フェリクス・ホフマンの「グリム童話・ねむりひめ」(一九五九年作)。もう一冊はアメリカの作家ワシントン・ガークの『二〇〇まんびきのねこ』(一九二八年作)。共に絵本界では傑作として世界的古典に位置付けられている。前者は言わずと知れたグリムの「いばら姫」。後者は創作民話の部類に属する。昔話の語りの話法と昔話的ファンタスティックな物語展開で描かれた二〇世紀前期の作品である。

いまここで考えようと思っっていることは、二つの絵本の一般的な作品論的な比較ではない。少し視点を変えて、物語が嫌心なく影響を受ける、その制作時代の社会的風潮、大きくいえば時代思想についての二つの問題提起であり、話題提供である。

二つの絵本の物語にそってそのことを具体的に考えたい。まず「いばら姫」。

グリム兄弟がドイツ昔話を採集し始めたのが一八〇七年、それをまとめて最初に出版したのが、一八二二年である。従ってグリムの話の一つ一つは、西ヨーロッパ近世以前に民衆の間に語り継がれて来たものとみていい。当然「いばら姫」もその一つである。

物語について触れるゆとりがない。分かり難いかと思うが、直に本題にはいる。主たる登場人物はすべて王族。現世で欲しいものはすでに全部を手に入れているかに見える。しかし一番欲しいもの・子どもが王にはいない。しかも現世の人間である

第 23 便
2022.2.1
塩田平民話研究所
[事務局]
長野県小県郡
青木村大字当郷
2072 番地 2
☎0268-49-1231
shiodadaira.minwaken@outlook.jp

彼には全く儘ならない。王妃に子ども誕生を予告するのは蛙である。蛙は両生類。命の根源である水中でも自由に生息し、死と再生を繰り返す異能で特別な異界の住民である。姫に一五歳での錘(つむ)による死の呪いを掛けるのも、それを百年の眠りに換えるのも、現世の王と王妃には全く手の出せない、異界により近い境界に住む古い女である。王の出来ることは国中の錘をすべて焼き捨てること。それも不完全で、自分の足元の城に残してしまう体たらくだ。姫に目覚めのキスを与える王子もまた、偶然眠りの覚める百年目のその日、その国の城近くを通りかかったに過ぎない。

物語はすべて予言や呪いを主とする異界の力で進められる。現世の人々は王でさえそれを運命と受け入れる外ない。日常的に襲う疫病、飢餓・戦争その他を運命とする近世西欧人の世界観が嫌心なく色濃くそこに反映して見える。



句の作者 鶴彬と出会った▼鶴彬は 1908 年(明治 41 年)、石川県河北郡高松町に生まれた。16 歳で柳誌デビュー。「暴風と」の句は、そのころの作品だ。どんな激しい恋をしたのだろう。荒れる日本海を見ながら、少年の熱情を想った▼「軍神の像の真下の失業者」。日本は昭和と大恐慌の真つ只中。人々は塗炭の苦しみで喘ぎ、戦争への道を突き進んでいった時代。鶴彬は僅か 19 歳でプロレタリア川柳の道へ進む。治安維持法違反で二度の投獄、29 歳で獄死するまでに約 900 編の作品を残した▼「暁を抱いて闇にゐる蕾」。暗黒の時代にあってなお、心に「暁」を抱いて 17 文字で社会の矛盾を鋭く切り取り、読む人々を奮い立たせた鶴彬の川柳に心揺さぶられた▼世界中の人々の命を脅かすコロナウイルス、地球のあちこちで多発する「千年に一度」の災害、自国優先の政治が引き起こす紛争。再び「暗黒の時代」を迎えようとしている。ともすれば心折れそうになる日々の暮らしの中で、言葉の力を信じて学ぼう、自ら発し続けようと思う。仲間と共に▼「枯芝よ! 団結して春をまつ」。



「暴風と海との恋を見ましたか」▼目まぐるしく変わる荒れた空と三画波の海。11月下旬、能登で開かれた民主団体の集いに出かけ、冒頭の

(弘子)

弘法大師伝説を紐解く

論考

法井戸」は無心に
応じた老婆への恩

弘法井戸（青木村）



などは、薄汚れた僧衣に身を包んだ弘法大師の無心に
応えなかった老婆への戒め。逆に「弘



越戸で採取した焼餅石

東北から九州まで全国津々浦々に広がる弘法伝説。研究者の調査によれば、その数5千以上と言われる。塩田平周辺も多分に漏れない。「本郷のざる水」「舞田峠／越戸峠の焼餅石」「沓掛の石芋」

寵の形を取る。そのうえ残り水を捨てようとした弘法大師を戒めてもいてユニークだ。来訪神型に分類されるこうした形の類話は至る所で見られる。弘法大師がそれらの地を隈なく歩いたのかと言え、そうではあるまい。ではなぜそんなにも来訪神型の類話が多いのか。注目すべきは、民間信仰の太子（おおいこ）信仰だ。太子は、旧暦霜月下弦の日（＝冬至）の夜、一陽来復の新たな神の子としてやってくる。生命力の再生を促す神だ。家々では新嘗用の新穀を供えて迎える。この風習と相まつて大師講も各地に伝承されるようになった。供えるのは小豆粥や団子だ。この日は必ず雪が降るともいわれる。一夜の宿を乞うた大師をもてなすために畑の作物を盗んだ貧しい老女の足跡を積もった雪が隠してくれる「あと隠しの雪」の伝説も、これらの習俗と結びついて伝えられた。弘法大師の使った箸が大木に生長したり、杖で水や温泉を湧出させたりという奇跡型の伝説、大師が発見したり造営したりしたと伝承される温泉や寺社も数多い。独鈷山前山寺もその一つだ。前山寺の縁起には、「弘仁年中（812）空海上人が護摩修行の霊

空海は、平安時代を代表する僧侶であるとともに、優れた書家、文章の達人としてもよく知られる。さらに、教育者、科学者としても、数多の業績を残した。18歳で官吏の養成機関であった大学を辞し仏門に入る決心を固める。



「高野大師行状図絵」巻二より「大師御入唐事」重要文化財（高野山・地蔵院）

場として開創したと伝えられている」とある。同年は、京都の高雄山寺で空海が最澄に結縁灌頂（けちえんかんじょう）を受けた年。遠い信州まで足を延ばしたとは考えにくい。「弘法大師」は、空海没後86年を経た92年に贈られた諡号（しごう）である。弘法伝説そのものは生前の空海の行状について語られているのに、「空海伝説」とは言わない。弘法伝説が全国に流布している所以が、この辺りにもありそうだ。

以後12年間、山林修行者として山野を駆け巡る。31歳の時、遣唐使の船に乗り入唐。奇しくも同じ船団に最澄が乗り合わせていた。空海は、密教の第一人者であった恵果から真言密教を伝授され2年で帰国する。高野山に禅院を開いたのは45歳のとき。東寺と高野山を行き来し、真言密教を広めた。835年62歳で入定。今なお永遠の瞑想に入っているという。『弘法大師御行状集』や『高野大師御伝』が世に出たのは、諡号を贈られて後、100年・200年後のことだ。高野聖集団が全国回國し布教に努め始めた時期と合致する。弘法伝説は、彼らの手も借りながら全国に広まっていったものと考えられる。同じ時代を生き、密教という共通点を持ちながら、数多の伝説が残る空海と、天台宗の祖・最澄とは隔たりを見せる。政治権力と濃密に結びついたエリート志向の最澄に対し、空海は生活に根ざす現場主義、民衆派志向であった。軸足の相違もまた、伝説誕生に一役買っている。（弘）



高野山奥の院 弘法大師御廟

塩田西小学校 民話語り

塩田西小学校 学校司書 武田 道子

塩田平という日本でも有数の民話の故郷で、子ども達にせひ生の声の語り聞かせてあげたいと思いの企画しました。民話というものは普通のお話と違いその土地に代々伝わってきたものであり、また次世代へ伝えていく大切なものです。

今回、子ども達が語りを聞いて大人になったときに、自分の子ども達へ語って聞かせてあげられるよう

な民話に触れることができました。コロナ感染防止対策で全校で集まることができず、各クラス二人ずつ入り、語り手の顔が見えるようにマスクはせず、フェイスガードとアクリル板を使い語っていたきました。一つの語りが10分から15分、それを二つということで、はたして子ども達は最後まで集中して聞くこ

とができるのか不安な気持ちもありました。しかし、始めてみると子ども達は目を輝かせながら前のめりになって語りの世界に引き込まれていました。子ども達から、楽しいお話だった、聞いたことのない話が聞けて面白かった、方言がすごかったとの感想を聞きました。寒く、また雨でお足元の悪い中、教室までお越しいただき素晴らしい語りをお聞かせいただいたこと大変感謝しております。



ふるさとの民話探訪 19 湯に入った木像

別所温泉にある国宝安楽寺八角三重塔を参拝するため本堂脇で受付を済ませ潜り戸を抜けると、やおら神聖な別世界に入ったような面持ちになる。窪田充穂・島木赤彦らの歌碑に目を転じながら歩を進め、石段を中程まで上ると、右手に傳芳堂（開山堂）が佇む。中に収蔵されて

開山 椎谷惟仙（しゅうごくいせん）
禪師と二世 幼牛恵仁（ようぎゅうえにん）
禪師の等身大木彫椅像二体。惟仙は信濃出身の僧、恵仁は惟仙に従って来朝した中国僧である。惟仙像は鎌倉末期1329年の作。恵仁像も同時期の作と考えられる。檜材を用いた寄木造で、目には水晶で作った玉眼が入れられている。いずれも国指定重要文化財。



この二体の像が、別所の共同浴場の湯に入ったという話がある。600年も昔のこと、当時、別所にあつた七つの共同浴場の一つ、北向観音堂前の通りにあつた久我湯から、毎晩遅く老人の話声が聞こえる。中を覗いても誰もいない。同じころ、夜中過ぎに安楽寺に行き来する人の足音がするという噂が立った。二人の禪師の木像が怪しいということになり、木像が歩かないようにと目玉を抜いて取つておくことにした。案の定、真夜中の入浴は止んだ。以来、久我湯は禪師湯と呼ばれるようになり、抜き取られた目玉は昭和9年の修理の際に再びはめ込まれたという。

（弘）

産川

昨年の春から秋、私は案山子のプロジェクトに関わっていた。別所線沿線に案山子を立てて応援しようというもので、最終的には26の参加団体により142体の案山子や看板が設置された▼基本的な作り方の手引きやビデオ製作、参加団体の募集、子ども達と一緒にたつての案山子づくり、設置場所の交渉、設置期間中のパトロール、解体までと、期間も長くそれなりに注目も浴びたプロジェクトで、コロナの感染状況をみながらの活動は結構忙しかったが充実したものだった▼「案山子は古事記にも登場するよ」と稲垣所長から教えていただいた。久延毘古（くえびこ）という名で、大国主命の問いに答える知恵のある神様だという▼西洋のお話にも案山子の登場するものがあるが、「オズの魔法使い」の案山子は無知知恵を求めて旅に出たはず。古事記の久延毘古は「崩え彦」で「歩けな

いが天下のことをことごとく知る神」とのことだ。この違いも興味深い、「オズ：」の案山子も知恵が無いわけではなく使い方を知らなかったのではないかと思う。（恵美子）



民話とわたし II — 本当の豊かさ —

塩田平民話研究所友の会員 伴 美佐子

「民話の宝庫」と呼ばれる塩田地区、幸運なことに私は、この地の公民館に平成18年から6年間お世話になりました。公民館での主務は34ある自治会毎に年一回、青少年育成をテーマとした懇談会を開催することでした。高名な先生を講師にお招きすることもありましたが、何よりも印象に残っている会は、塩田平民話研究所の皆さんの語りでした。

文盲の若者が、離れて暮らす新妻に贈る一日一個の小石の物語。帰省途中の峠道で、夜中に赤子を産み落とした娘を助けた犬の物語。等々祖母の膝に抱かれていた子どもが物語に惹き寄せられるように語り手にじり寄り寄っていきます。ろうそくの灯りの中でキラキラと輝く眼差しは、得も言われぬほど美しく、素敵な光景でした。

私たちが取り巻く社会は急速に変化し、テクノロジーは進化し続けています。でも「本当の豊かさって、なんだろう？」とよく考えます。たぶんあの時、この上なく豊かな光景を目にしましたから・・・

動物と自然と人間が曖昧に行き交う民話の世界

草の根文化コーディネーター 直井 恵

昨年6月から8月にかけて『民話と演劇』の世界をもう一度紡ぎなおすための物語』と題した企画を行いました。これは日本とフィリピン、インドネシアの3カ国で同時に行われた青少年の国際交流企画で、人と自然の関わりをもう一度見つめ直すことを目的に、各地で伝承される民話を語り部の方達から収集し、演劇ファシリテーターとともにその民話を読み解き、そ

れらを演劇として再び表現し、オンラインで発表しあうというものでした。私たちは塩田平民話研究所の稲垣勇一さんのもとを訪れ、上田に伝わる民話『小泉小太郎』と『いでいだらぼっちと後家さん』のお話を聞かせていただきました。計8回のワークショップを通して、稲垣さんから聞いた民話をベースに二つの演劇作品を創り上げていきました。ワークショップでは実

事務局だより

◆新型コロナ感染症の感染拡大を受け、昨年10月に予定していた新企画「民話語りっこ学びっこ」は中止しました。

◆来年度も、感染拡大の状況を見つづ、6/26・8/28・1/29に、上田創造館において「昔ばなし語りの会」を開催する予定です。

実際に鞍が淵へフィールドワークに出かけ、民話が生まれた世界を体を通して感じたり、お話の中で印象に残った場面をカラダで表現するボディワークを行ったりしました。



フィリピンもインドネシアも、今回参加した若者たちはいずれも先住民です。村には、動物と自然と人間が曖昧に行き交う世界観や文化がまだ残り、そうした感覚は民話の中でも語り継がれていました。一方、近代化された日本の暮らしでは自然と人と生き物たちの世界は分断されがちです。長雨が降り続き、河川が氾濫し、人の手が入ることのない里山が次々と崩れていく。自然を満喫しながらも、もはや愛と畏怖を持って自然と接する方法を忘れてしまった私たちに、民話がつむぐ物語は動物と自然と人間の複雑に絡み合う世界観を映し出してくれました。

編集後記

正月明け早々、かつてないスピードでオミクロン株の感染爆発が起きた。水際対策に大穴が開いていたためだ



▼まん延防止等重点措置が真つ先に適用された沖縄・山口・広島。感染は米軍基地から始まった。日本へ出国する際の米兵のPCR検査が免除されていた。繁華街への米兵の歩きも阻止できなかつた。日米地位協定のなせる業だ。▼戦後76年、未だ日本はアメリカの占領地だ。日本国内であるのに米軍の無法がまかり通っている。低空飛行も止まない▼劇団文化座による「命どう宝」を観劇した。沖縄返還前の民衆の闘い「島ぐるみ闘争」が見事に描かれ、圧巻だった。返還から50年、沖縄は未だ基地の島だ。完全返還までの道程は遠い▼沖縄の文化も、基地によって蔑ろにされてきた。イザイホーが行われなくなつて44年。琉球語を話す人は3割だという。言葉の消滅は、文化の消滅に繋がる▼方言を取り入れた民話を語るには、方言を使う土地の生活・文化を学ばねばならない。新型コロナによつてもたらされたウイズ・コロナの新たな文化の中で、見失つてはならない古の文化や言葉があることを肝に銘じたい。▼本紙に寄稿いただきました武田道子様・直井恵様に感謝申し上げます。(弘)